紙碑

被爆老人のあかし

広島原爆養護ホーム

紙　碑

—被爆老人のあかし—

第　四　集

広島原爆養護ホーム

はじめに

昭和二十年八月　世界に類をみない原子爆弾により、一瞬にして廃墟と化した広島。そして多数の市民が被爆により犠牲となったあの日から、五十年の歳月が流れました。

被爆体験記「紙碑」は、被爆直後の想像を絶する状況下の中から辛うじて避難し、その後、原爆障害に脅えながら生き抜いてこられた入園者の方々が、自らの被爆の体験を通じて、当時の生々しい実相を後世に伝えるため、昭和五十六年七月　当ホームの開設十周年・被爆三十五周年の年に、「紙碑」第一集を発刊いたしました。それ以来、昭和六十年に第二集、平成二年に第三集を発刊いたしまして、各方面から温かいご支援とご理解をいただいております。

当ホームには、毎年国内外から多数の方々が来園されます。その際、入園者の方々は、被爆の惨禍、平和の尊さを膝を交えて話し、被爆体験の継承を促していくことで、恒久平和実現の一端を担っておられます。入園者の方々は、心の奥底に深い傷跡を残し、原爆が付きまとった人生を歩んでこられましたが、当ホームでは、同じ境遇にある被爆者同志が肩を寄せ合い慰めいたわりつつ、余生を過ごしておられます。

このたび、当ホーム開設二十五周年・被爆五十周年の節目を記念し、入園者の方々から貴重な被爆の体験をお話しいただき、それを体験記としてとりまとめ、核兵器のない平和な世界と、二度と被爆者を作ってはいけないという切なる願いを込めて、第四集を発行することになりました。

入園者の方々は、年々高齢化し健康障害とともに寝たきり等日常生活に介護を要する方々か増加していますが、第四集も多数のご協力をいただき、被爆当時の状況、被爆後の生活等が鮮明に記され、入園者の方々がさまざまな逆境と闘い続けてこられた生活史が内包され被災の実相を継承するにふさわしい内容になっており、皆さんが後世に被爆体験を伝えるため、懸命に当時の記憶をたどり意欲を燃やされました熱意に、深い敬意を捧げたいと思います。

財団法人広島原爆被爆者援護事業団
広島原爆養護ホーム職員一同

◈「紙碑・被爆老人のあかし」◈

目　次

はじめに……職員一同

舟入むつみ園

忘れえぬ被爆の惨状……青木　愛子……1
救出できなかった妹……石井ミ子コ……4
この世で地獄を見た……石山　鉄男……6
体は動かず死を覚悟……植田　良子……8
消息の分からぬ父母を偲んで……清本　幸子……10
体中ガラスの破片が刺さった……高野　芳子……12
あの日の光景はこの世の地獄……米山　満義……15
心の傷は癒えないままに……佐々木淺子……18
ピカが奪った私の夢……末永　博明……20
命を救った夫の大きな愛……樽谷　ナカ……22

余生は平和学習の手伝いを……土岡　善人……24
如来様が助けて下さった……都河　寿子……26
娘ざかりは恐怖の毎日……寺尾　隆恵……28
母を捜し死体のムシロをめくる……西中シズコ……30
悔やまれる一ぱいの水……西原　昭治……32
今日一日が大事だと思う日々……波田シヅヨ……34
娘と間違えられた運命の出逢い……平松ツヤ子……36
家の下敷きになった我が子……福原　寛……38
被爆の苦しみは今も……福光　勝美……41
父さんの分まで生きるよ……光本　隆……43
原爆のショックで動かなくなった胎児……湊　冨士子……45
被爆の怪我今も痛み眠れない……見崎ヨシ子……47
足の痛みが語る五十年前……宮川　敏子……49
虹色と思う瞬間すごい爆風が……森尾　悦郎……51
郵便配達をしながら生活を支える……矢島　春枝……53
父と姉達の遺体にすがって……山田　文枝……55

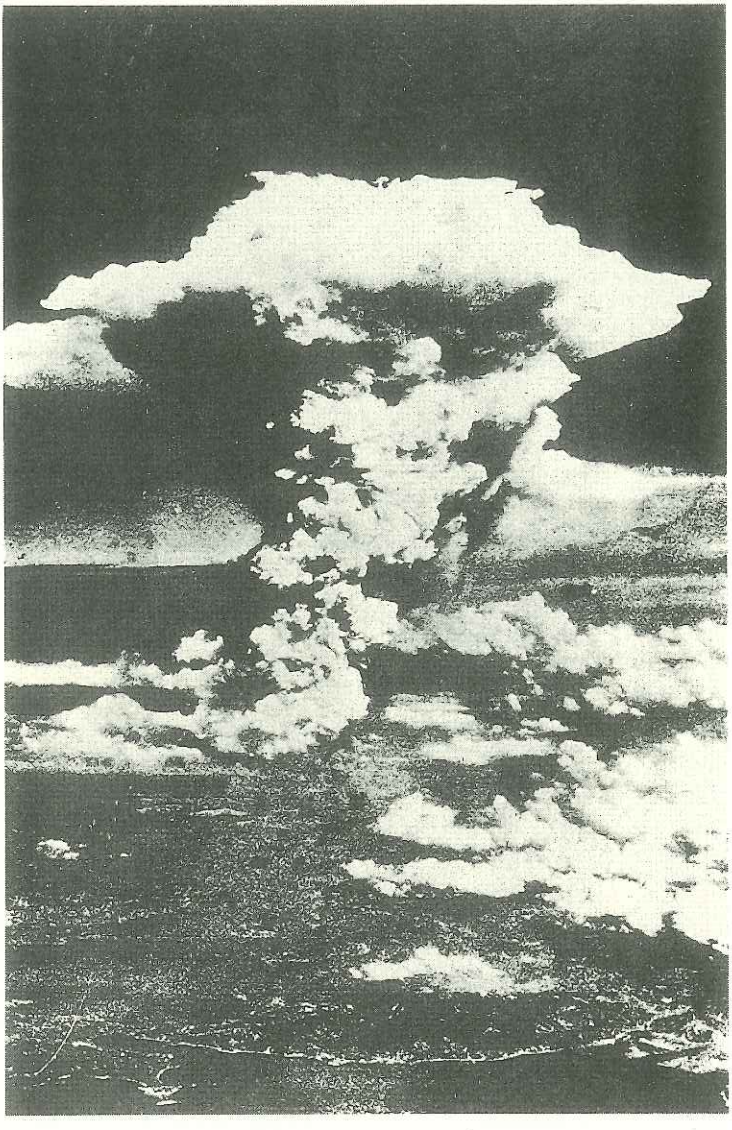
神田山やすらぎ園

突然大きな音が・・・……小幡ミサヲ……59
「B29」……高田　冨貴……61
あの日から五十年……内藤羽満恵……63
探し続けた姉……西川日露九……66
目がくらむ強烈な光が・・・……八島ヲリノ……68
父母の死……山中　光子……70
白い衿……芳信ハルヨ……72

倉掛のぞみ園

赤土のような雨の中を……網井　和子……75
ガラスの破片が体に……石本サダコ……77
生き地獄……植松　清枝……79
フラッシュのような眩しい光が・・・……香川　妙香……82
勤労奉仕……狩山紀久子……84
生活苦の毎日……古金　金子……86
いつまでも消えない火傷……田中アヤメ……88

地獄のような街……武田　光子……91
燃え続ける闇の中の炎……中農　アヤ……93
死体の中を泳いで……中本フミヱ……95
死を覚悟の「水を下さい」……西本　良子……97
子供を背負い避難……野村　定子……99
強烈な閃光……原田　幸恵……101
鮮烈なあの日の記憶……山口勝四郎……103
徴兵検査……山中　幸吾……106
二年間も続いた粥ばかりの食事……山岡カズミ……108
焼けつくような閃光が……深山　恒子……110
トラックで運ぶ死体……松本　秋子……112
怪我人で一杯の避難先……森本キクノ……114
土手で夜を明かし……吉野サヨミ……116

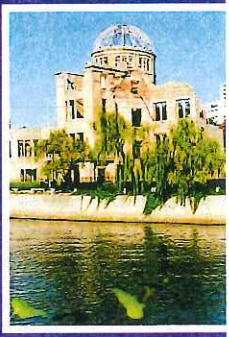


昭和20年８月６日午前８時15分……広島に原子爆弾が投下された。
爆発点は原爆ドーム（旧広島産業奨励館）に近い島病院の上、高度580m点、真夏の太陽を受けて不気味に光る巨大な原子雲の下に、30万とも40万ともいわれる広島市民のうめき声がキノコ雲の下にある。

（写真中国新聞社提供）

紙碑・被爆老人のあかし　第四集

平成七年十二月十一日　印刷
平成七年十二月十五日　発行

編集者　財団
発行者　法人　広島原爆被爆者援護事業団
広島市安佐北区倉掛三丁目五〇番一号

印刷　株式会社　ＳＡ社
〒730 広島市南区比治山町七番一九号
電話（〇八二）二六四―一一四八